

『古琉球』に見る伊波普猷の沖縄観と民衆への提言

竹内, 太郎
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

<https://doi.org/10.15017/1854974>

出版情報：地球社会統合科学研究. 7, pp.59-68, 2017-09-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：



『古琉球』に見る伊波普猷の沖縄観と民衆への提言

タケ ウチ タ ロウ
竹 内 太 郎

1. はじめに

この論考では、「沖縄学の父」と称される、伊波普猷(1876~1947)の代表的著作である『古琉球』から、主に「沖縄人の最大欠点」、「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」、「琉球処分は一種の奴隷解放なり」という三つの論考を取り上げる。これを見ることで、伊波が沖縄の社会や民衆に対してどのような問題意識をもっていたかを探ることが可能である。さらに、本論考は『古琉球』全体をまとめて論じる際や啓蒙活動の断念における伊波の心理状況、すなわち「絶望」の深さを鑑みる際の足がかりとなり得るものである。これらの三つの論考をまとめて扱う理由は、主に以下の2点である。

第一に、1900年代後半から1920年代前半の伊波は、主に沖縄の民衆に対して、講演活動などの啓蒙活動を熱心に行っていたが、その時期の講演内容等を知ることは現存の諸資料からは難しい。これらの論文について、伊波自身が「これはわけて郷里の人々に熟読して貰ひ度い」¹と明記しており、そこから、伊波が当時の沖縄をどのように見ていたか、また、沖縄の民衆にどのようなことを伝えたかったのかを探ることが可能である。伊波の著述の特徴として、専門的な学術書を記す際にも、その時々々の沖縄への問題意識を書くことは常であったが、直接的なメッセージとして、講演という形ではなく、文章で示した例はそれほど多くはない。

第二は、この『古琉球』という著作自体が持つ特徴に及ぶ。これは、1911年に初版が出版されるが、1916年に再版、1922年に三版、1942年に改版というように、版を重ねるたび、加筆修正が行われ、また収録論文の取捨選択が行われたりするという特徴を持っている。再版から三版への内容の異同はなく、その違いは表紙の口絵程度に留まるが、【表1】を見れば明らかのように、初版から再版には差異が見られ、とりわけ著しいのは三版と改版との違いである。伊波は1924年、その生活の場を沖縄から東京に移し、学究生活へと入るが、その時、柳田國男(1875~1962)や折口信夫(1887~1953)らの「南島談話会」に出席する。そして、そこで得た成果が、こ

の改版には多分に反映されていると見ることができる。また、本論考では詳しく扱うことは出来ないが、伊波の思想の一つとして、沖縄の「個性」について言及したものがあ。筆者は、これを伊波の言葉から「無雙絶倫」論と呼んでいるが、それに言及した「琉球史の趨勢」という論文の一部が削除されていたり、今回扱う「琉球処分は一種の奴隷解放なり」が収録されていなかったりと、同じ『古琉球』という題を冠した書物でも、全くの「別物」として見る必要があると考えられる。²よって、現在、多く目に触れる機会の多い『古琉球』改版には示されていない、謂わば「思想醸成期」であった1900年代後半~1920年代前半に示された思想を、同名の書物である『古琉球』再版(三版)から明らかにしたい。

先行研究を手にとると、これら三つをまとめて論じたものは見当たらない。『古琉球』について深く分析したものでは、鹿野政直の『沖縄の淵 伊波普猷とその時代』(1993年)や石田正治『愛郷者伊波普猷 戦略としての日琉同祖論』(2010年)があるが、これらの研究は、各論の分析に止まっている。

鹿野は、上記の著作で『古琉球』というひとつの章を設けて論じているが、時系列的に伊波の思想を捉える性格のものであるため、1911年の『古琉球』初版にその話が及ぶに過ぎない。そして、初版の各論考を8つの群に分けているが、第一群「琉球の性格全体にかかわる史論」として、「琉球人の祖先に就いて」「琉球史の趨勢」「沖縄人の最大欠点」「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」を一括りにしている。先にも述べたように、「琉球処分は一種の奴隷解放なり」はこの時点では収録されていない。そして「琉球人の祖先に就いて」「琉球史の趨勢」という長文は、鹿野の言うとおり「琉球の性格全体にかかわる史論」であるが、以下二つの論考は、「史論」というよりは、より身近な沖縄の人々の問題をその歴史的背景から取り扱ったもので、「琉球人の祖先に就いて」「琉球史の趨勢」と一括りにすることにより、伊波が同時代の沖縄の人々に伝えたかった想いが際立たなくなるのではないだろうか。

本論考では、これらの研究との差異を示すためにも、

【表1】

| | 初版 (1911) | 再版 (1916) | 三版 (1922) | 改版 (1942) |
|-----|-------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| 出版社 | 沖縄公論社 (沖縄) | 糖業研究会出版部 (東京) | 郷土研究会出版部 (東京) | 青磁社 (東京) |
| 1 | 琉球人の祖先に就いて | 琉球人の祖先に就いて | 琉球人の祖先に就いて | 琉球人の祖先に就いて |
| 2 | 琉球史の趨勢 | 琉球史の趨勢 | 琉球史の趨勢 | 琉球史の趨勢 |
| 3 | 沖縄人の最大欠点 | 沖縄人の最大欠点 | 沖縄人の最大欠点 | 沖縄人の最大欠点 |
| 4 | 進化論より見たる沖縄の廃藩置県 | 進化論より見たる沖縄の廃藩置県 | 進化論より見たる沖縄の廃藩置県 | 進化論より見たる沖縄の廃藩置県 |
| 5 | 土塊石片録 | 琉球処分は一種の奴隷解放なり | 琉球処分は一種の奴隷解放なり | 土塊石片録 |
| 6 | 浦添考 | 土塊石片録 | 土塊石片録 | 浦添考 |
| 7 | 鳥尻といへる名称 | 鳥尻といへる名称 | 浦添考 | 鳥尻といへる名称 |
| 8 | 阿摩和利考 | 鳥尻といへる名称 | 鳥尻といへる名称 | 阿摩和利考 |
| 9 | 琉球に於ける倭寇の史料 | 阿摩和利考 | 阿摩和利考 | 琉球に於ける倭寇の史料 |
| 10 | 琉球文にて記せる最後の金石文 | 琉球に於ける倭寇の史料 | 琉球に於ける倭寇の史料 | 琉球文にて記せる最後の金石文 |
| 11 | 官生騒動に就いて | 琉球文にて記せる最後の金石文 | 琉球文にて記せる最後の金石文 | 官生騒動に就いて |
| 12 | 俚諺によりて説明されたる沖縄の社会 | 官生騒動に就いて | 官生騒動に就いて | 三島問答 |
| 13 | 沖縄に固有の文字ありしや | 俚諺によりて説明されたる沖縄の社会 | 俚諺によりて説明されたる沖縄の社会 | 俚諺によりて説明されたる沖縄の社会 |
| 14 | 琉球の國劇 | 沖縄に固有の文字ありしや | 沖縄に固有の文字ありしや | 沖縄に固有の文字ありしや |
| 15 | 琉球音楽者の鼻祖アカインコ | 琉球の國劇 | 琉球の國劇 | 琉球の國劇 |
| 16 | オモロ七種 | 琉球音楽者の鼻祖アカインコ | 琉球音楽者の鼻祖アカインコ | 琉球音楽者の鼻祖アカインコ |
| 17 | 琉歌と頭韻法 | オモロ七種 | オモロ七種 | オモロ七種 |
| 18 | 病床日記の一節 | 琉歌と頭韻法 | 琉歌と頭韻法 | 琉球の口承文芸 |
| 19 | 可憐なる八重山乙女 | 可憐なる八重山乙女 | 可憐なる八重山乙女 | 琉歌と頭韻法 |
| 20 | 歌謡に現はれたる八重山の開拓 | 歌謡に現はれたる八重山開拓 | 歌謡に現はれたる八重山開拓 | 音楽家の息のかかった琉歌 |
| 21 | 八重山島の歌鶯 | 南より | 南より | 可憐なる八重山乙女 |
| 22 | 八重山童謡集の序 | 鶯の歌 | 鶯の歌 | 中宗根の豊見親の苦哀 |
| 23 | 琉球後の掛結に就いて | 小さき蟹の歌 | 小さき蟹の歌 | 八重山征伐のアヤゴ |
| 24 | P音考 | 『八重山童謡集』の序 | 『八重山童謡集』の序 | 狩俣のいさめが |
| 25 | 琉球の神話 | 琉球後の掛結に就いて | 琉球後の掛結に就いて | まもや |
| 26 | | P音考 | P音考 | 民謡に現はれたる八重山の開拓 |
| 27 | | 琉球の神話 | 琉球の神話 | 南より |
| 28 | | 『弓張月』の毛國県が辞世の歌について | 『弓張月』の毛國県が辞世の歌について | 鶯の歌 |
| 29 | | 琉球語の聖書 | 琉球語の聖書 | 小さき蟹の歌 |
| 30 | | 追遠記 | 追遠記 | ぼすぼう節 |
| 31 | | | | 『八重山童謡集』の序 |
| 32 | | | | 琉球後の掛結に就いて |
| 33 | | | | P音考 |
| 34 | | | | 琉球の神話 |
| 35 | | | | 『弓張月』の毛國県が辞世の歌について |
| 36 | | | | をなり神を歌つた大島のおもり |
| 37 | | | | 祖神について |
| 38 | | | | 琉球和歌史管見 |
| 39 | | | | 琉球譚聖書 |
| 40 | | | | 追遠記 |
| 41 | | | | 二位尼の煙管 |
| 42 | | | | 迎へほこら |
| 附録 | 羽地按司仕置 | 『混効験集』 | 『混効験集』 | 『混効験集』解題 |
| 附録 | 具志頭親方独物語 | | | 混効験集 |

三つの論考に貫かれていた伊波の同時代の沖縄に対する問題意識を明らかにすることを目的の一つとする。

最後に、それぞれの考察に入る前に、簡単にこれらの論考に至るまでの伊波の思想である「日琉同祖論」と「無雙絶倫」論について簡単に説明する。

「日琉同祖論」は古くは向象賢 (1617 ~ 1676) が唱え、近代ではB.H.チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850 ~ 1935) が唱えた、日本と琉球はもとの祖先を同じくするとした学説であるが、伊波はそれをさらに体系化し、自身の言語学的な研究成果や沖縄の古典である『おもろさうし』を中心に据え、それを補完する形で鳥居龍蔵 (1870 ~ 1953) の人類学の成果や民俗学、風俗や諺などにみる「同祖」の根拠を明らかにした。よって、

この当時の伊波にとって、この学説は絶対的であり、強固なものであった。

そして「無雙絶倫」論は、沖縄の「個性」を、その文化的な特徴や琉球王国という政治的国家を築いたこと、またそれに伴い、中継貿易などを行った経済活動に見出し、沖縄人でなければ発揮することの出来ないものの重要性を説いた。

このような背景のもと、以下の論考は展開されることになったのである。

2. 「沖縄人の最大欠点」

この論考は1909年2月11日の『沖縄新聞』に掲載され、

1911年出版の『古琉球』初版に、「琉球人の祖先に就いて」、「琉球史の趨勢」に続くものとして収められた比較的短い論考である。その冒頭に伊波は言う。

沖縄人の最大欠点は人種が違ふといふことでもない。言語が違ふといふ事でもない。風俗が違ふといふ事でもない。習慣が違ふといふことでもない。³

伊波自身は、はっきりと述べていないが、ここには、日本人と沖縄人は、その表面上の根本的な部分はまづ違わないのだ、という「日琉同祖論」の主張を見出すことも可能である。さらに、これに続いて、自身をも含めた「沖縄人の最大欠点」を「恩を忘れ易いといふ事」⁴に見出す。そして、その例として、「二股膏薬主義」や「空道」⁵といった過去の事例を紹介する。「食を與ふる者は我が主也」という沖縄の俚諺もこのようなところからきており、これを伊波は「娼妓主義」、すなわち「御都合主義」という一種の「天性」として以下のように説明する。

この御都合主義は沖縄人の第二の天性となつて深く深くその潜在意識に潜んでゐる。これはた沖縄人の欠点中の最大なるものではあるまいか。世にかういふ種類の人程恐しい者はない、彼等は自分等の利益のためには友も売る師も売る場合によつては国も売る。⁶

ここでは、後にセンセーショナルに扱われることとなる、広津和郎(1891～1968)の『さまよへる琉球人』(1926年)に登場するような「沖縄人」の姿が述べられているが、筆者は、伊波が「御都合主義」を沖縄人の「第二の天性」としたことにとりわけ注目したい。この謂わば「欠点」が「第二の天性」だとすれば、「第一の天性」とは何か。それは、「琉球史の趨勢」において伊波が主張した、「沖縄人微りせゞ到底発現し得べからざりし所」⁷、すなわち「無雙絶倫」^{ユニークネス}としての「個性」を指しているとも解釈できる。

この「欠点」は「沖縄人のみの罪」ではないが、「現代に於ては沖縄人にして第一この大欠点をうめあはず事が出来ないとしたら、沖縄人ハ市民としても人類としてもごくごくつまらないものである」⁸と伊波は言う。そして、この「欠点」を補うためには「教育」であり、「人格の高い教育家に沖縄の青年を感化させる事」⁹だとして、この文章をまとめる。

最後の「人格の高い教育家」云々の部分はとても抽象的であるが、伊波はここに関して、以下の二つを踏まえてこれを書いたと考えられる。

第一に、伊波が中学時代の恩師として終生敬愛した、教頭の下国良之助(1862～1931)と国語教師の田島利三郎(1870～1931)の存在である。ここでは詳細は省くが、下国は、教育者として、熱心に沖縄の発展のために学生たちに京都に修学旅行に行かせ、学問への興味を促した人物として、田島は、その学問的素養で生徒たちから慕われており、とりわけ伊波にとっては『おもろさうし』への道を拓いた恩人でもあった。伊波は、このような「恩師」の存在を意識し、彼らを想定して「人格の高い教育家」という言葉を用いたのであろう。

第二は、「琉球史の趨勢」の終盤に、伊波が教育家としてのあるべき姿について述べた部分である。「先生は精神上の医者」であり、「自ら患者の身になつて、患者の痛みを己が身に感ずるやうな人」でなければならず、また、教育者には「自分が養成した所の人物はとりもなほさず活ける勲章であるといふ丈けで満足して貰ひ度い」のような伊波の言葉を見れば、伊波がどのような人物を「人格の高い教育家」と見ていたかが少しは垣間見えるだろう。⁹

最後に、この論文に関して重要な点を二つ述べる。

一点目は、これが伊波にとって、自己切開作業の一種だったということである。これまで、自身も学生時代を通して経験したように、様々なヤマト出身の教育者たちが「沖縄の欠点」を挙げていた。中には下国のように、その上で沖縄を「改良」しようとした教師もいた。しかし、大半はそうではなく、「琉球史の趨勢」で述べられたように、その「欠点」は「軽蔑」の対象とされた。そのような状況に対し、伊波はその「欠点」について「同情」するように意識の変化を求めた。この論文には、「沖縄人」としての伊波が、自らも含めてその「欠点」を明らかにすることで、その「膿」を出すことを目的とし、さらには沖縄の教育家たちにその状況をさらけ出すという意味を有しているのである。

もう一点は、伊波がこれを、後に続く「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」、「琉球処分は一種の奴隷解放なり」¹⁰と併せて、「これはわけて郷里の人々に熟読して貰ひ度ひ」¹¹としたことである。伊波は、沖縄の人々のために、その「欠点」をとにかく追求し、知らしめようとした。鹿野政直は「沖縄と沖縄人の現状に対する伊波の怒りと、悲しみとに根ざして」おり、「そこには、人びとを挑発しつつ、「娼妓主義」からの脱却による主体形成をはかろうとする彼の心理が、投影されていた」と説明する。¹²「挑発」とまではいかないまでも、これが書かれた二年後には、河上肇(1879～1946)の舌禍事件¹³も起こり、沖縄の民衆や世論の間に、「帝国における沖縄の位置」に対して、敏感な気運が、ある程度

高まっていた中で、伊波がこのような論文を発表したことは、伊波の当時の問題意識を探る際に重要な観点である。

3. 「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」

この論考は、1909年12月12日、『沖縄新聞』に所載された。1910年5月31日～6月1日に「進化学上より見たる沖縄の廃藩置県」と題して連載、1911年『古琉球』初版に「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」（再版以後、「見たる」は「見たる」と改める）と題して所収、1942年『古琉球』改版にて改稿して収められた。¹⁴

まず、タイトルからみてもわかるように、これは「進化論」から沖縄の廃藩置県（すなわち「琉球処分」）について考察した、とてもユニークなものである。伊波はこの時期、キリスト教や優生学など、様々な思想に影響を受けるが、その最も影響を受けた思想の一つが「進化論」、とりわけ「社会進化論」であった。

ここではまず、沖縄の「体質的な進化」について述べられる。伊波は鳥居龍蔵の人類学的調査の結果、他府県人と比べ、沖縄人の平均身長が低いことを指摘し、その主たる原因を「久しく絶海の孤島に住居してゐて、餘り他の血液を混じなかつたこと」¹⁵に求めた。しかし、廃藩置県が起り、「沖縄がかきまぜられた」¹⁶その結果、「旧制度の破壊と共に永い間の圧迫が除去されたので、今まで縮んで居た沖縄人は延び始めた」¹⁷と伊波は言う。薩摩の圧政に沖縄人が「縮んで居た」原因を求め、恰もそれが無くなった結果、「体質的伸長」が促されたような論理が用いられているところが、ここでの「琉球処分」（廃藩置県）観の特徴のひとつでもある。

そして、廃藩置県は、「体質的伸長」だけではなく、「思想的伸長」も促したことを伊波は説明する。旧来、朱子学に「中毒してゐた」沖縄人は、廃藩置県によって、「即ち活きた仏教に接し、陽明学に接し、基督教に接し、自然主義に接し、其他幾多の新思想に接した」のであった。¹⁸これが「思想的伸長」であり、こういった点から伊波は、「廃藩置県を歓迎し、明治政府を謳歌する」¹⁹と言う。

しかし、伊波は廃藩置県をただ喜んだわけではなかった。伊波は過去の—薩摩支配時代の沖縄人を、海の生物である「フジツボ」に例え、持論を展開していく。フジツボは、蟹や蝦のように、自ら動いて餌をとることは出来ず、「足も無い眼も無い」生き物であるが、波の強い場所では、蟹や蝦はフジツボと競争することはできないと言う。伊波は薩摩支配時代の琉球王国を「風波の荒い所」と表現し、沖縄人たちの「フジツボ的社会組織は斯ういふ境遇には最も適當なるもの」で、「現今沖縄人が

沖縄群島に五十万といふ程盛に生活してゐるのは即ち其所の生活に適してゐた証拠」であると述べる。²⁰「世界の中でいかに強い武士も此場では扇子一本を持つた沖縄人と競争は出来ぬ」²¹と言うのも、こうした考えからであった。

そして、本節の冒頭でも述べたように、当時の伊波は「進化論」に熱心であったが、自身の「進化論」的考察として次のように言う。

世の中では通例優つた者が勝ち、劣つた者が敗れるといふが、優勝劣敗といつても我々が優者と見做す者が何時も必ず勝り、劣者と見做す者が敗れるとも限らぬ。ただその場合に於て生存に適する者が生存する。²²

伊波はこの時期、「優生思想」にも興味を示し、講演の場でもそういった内容の話をしてしたが、それを沖縄に照らし合わせて見た場合、その優勝劣敗の法則が通用するとは限らないということをここで述べているのである。また、「進化論」の観点から見ると、ここでは「個体の生存闘争の結果」としての優勝劣敗を説いたスペンサー（Herbert Spencer, 1820～1903）の「社会進化論」の説というより、むしろ、「個体それぞれに生まれつき定められている適応力」に重点を置いたダーウィン（Charles Robert Darwin, 1809～1882）の「自然選択説」に近い考え方を示していることがわかる。²³

このように説いた上で、伊波は、廃藩置県後の沖縄人を「波が打当てなくなつた岸上のフジツボ」²⁴に例えた。「足も無い眼もない」フジツボは、廃藩置県の結果、足が生え眼が明いた。すなわち「体質的伸長」と「思想的伸長」を達成することが出来たが、「なほ不自由を感じざるを得ない」ように伊波の目には映った。²⁵そしてそれは、未だに「意志」が弱いことに起因していた。ここは、「沖縄人の最大欠点」の一つだと伊波が説いた「御都合主義」とも関わってくるところである。「意志の弱さ」も一種の「欠点」だと伊波は捉えたのであろう。そして、これを改善するために、「意志教育」²⁶が必要であると、この論は結ばれる。

この論考では伊波の二通りの廃藩置県（琉球処分）観が示されている。

一つは、フジツボに足を与え、眼を開かせたとするもの。すなわち、それは「沖縄がかきまぜられた」ことにより「雌雄淘汰」が起こったこと、諸思想に触れたことによるものであった。そして、もう一つは、そのフジツボを困らせるものであった。それは急な、しかも、沖縄側の意図というものがそこにはない形での「近代化」に

よって、沖縄の社会に起こった成長痛のような歪みによるものであった。これは次に論じるところの「琉球処分は一種の奴隷解放なり」という論考の中で展開される議論にも連関する。

4. 「琉球処分は一種の奴隷解放なり」

これは、『古琉球』では1916年の再版、1922年の三版だけに第五論文として収められたものである。もとは喜舎場朝賢『琉球見聞録』（1914年）の「序文」として伊波が書いたもので、後に『古琉球の政治』（1922年）の「附録」としても所載された。前節の「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」に続き、1879年の「琉球処分」（廃藩置県）について、伊波自身の見解や歴史観を示した内容となっている。

また、伊波は『古琉球』再版のまえがき、「古琉球の再版にあたりて」において、その所収の理由を次のように述べている。

大正三年の二月二十七日に病床で書いたものである。その時私は危篤といはれてゐたが、それを自覚してゐなかつた為に一気呵成に之を書き上げた。私がかつた時に死んでゐたら、この一編は私の絶筆になつてゐたであらう。さういふ因縁から私は特に之を加へることにした。²⁷

実際、『伊波普猷全集』第11巻の「年譜」を見ると、この時期、伊波は重い腎臓病を患っていたようで、講演活動や執筆活動をあまり行っていないことがわかる。そうしたこともあり、この文章はどこか「遺言」のような口調で書かれているとも読める。

ここでは、まず、この論文の内容について簡単に触れる。その上で、伊波がここで沖縄の人々に何を伝えようとしたのか、また、何故1942年の『古琉球』改版にはこれが所載されなかったのかなどについて考察していく。

まず、その冒頭に伊波は言う。

今から三百年前（即ち慶長役以前）の琉球人は純然たる自主の民であつた、それ故に彼等は或程度までその天稟を發揮することが出来た。しかしながら両大国の間に介在する悲しさ、彼等はいつしか奴隷の境遇に沈淪して、十分にその天稟を發揮することが出来なくなつた。²⁸

ここで注目できるのは、「天稟」という言葉である。この言葉は「個性」という言葉に置き換えることができ、

それは「天は沖縄人ならざる他の人によつては決して自己を発現せざる所を沖縄人によつて発現する」²⁹と伊波が沖縄人の「無雙絶倫」としての「個性」を主張した部分とも関係している。そして伊波は、そのような「天稟」の發揮を妨げ、沖縄人を「奴隷の境遇」に陥らせたものとして薩摩藩の存在を挙げる。薩摩藩は、沖縄を「密貿易の機関」と位置づけ、「琉球の人民よりもヨリ多く琉球の土地を愛した」³⁰そして、「島津氏は琉球人がいつもちゅぶらりて頗る曖昧な人民であることを望んだ」³¹これが伊波の薩摩観であった。この「ちゅぶらりて頗る曖昧な人民」とは、「沖縄人の最大欠点」で伊波が指摘した「娼妓主義」や「御都合主義」のような性質とも関連してくる。伊波はこの「娼妓主義」的な沖縄人の姿を次のように語る。

奴隷の境遇に馴致されるにつれて、遂にそれを生き甲斐のある生活と思ふ様になり、かつて奴隷になるまいと力んで薩摩で殺されたその愛国者を嘲り、おまけに彼の名を組踊（脚本）で悪按司（悪者）の名にして、島津氏の歡心を買はうとまでに変り者になつた。³²

そして、伊波は「琉球処分」について言及する。「私は琉球処分は一種の奴隷解放と思つてゐる」³³これが伊波の「琉球処分」観であった。これについては「琉球人の祖先に就いて」（1911年）では「手を別つた同胞と邂逅して、同一の政治の下に幸福なる生活を送るやうになつた」³⁴と述べられ、「琉球史の趨勢」（1911年）では、「琉球処分は実に迷児を父母の膝下に連れて帰つた様なもの」³⁵と表現された。さらに、前述したように、「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」では、「廃藩置県を歓迎し、明治政府を謳歌する」³⁶と伊波は述べた。このように見ると、この「琉球処分」を「奴隷解放」とする伊波の考え方は、明治末期より展開されたことがわかる。そして、伊波がこのように言う大きな根拠として、二つが挙げられる。

第一の根拠は、前述の「琉球史の趨勢」の引用部を見ても明らかのように、「朝鮮人と日本人は遠い親類の関係であります、日本人と琉球人とは一人の母から生れた姉妹の関係である」という「日琉同祖論」を根拠としていた。³⁷伊波の脳裏には、祖先を同じくする者同士が、同一の国家の下に生活するのは当然であり、「琉球処分」はその契機を与えたという考えがあつたのである。

そして、第二の根拠は、「無雙絶倫」論である。筆者がこの冒頭でも述べたように、伊波はかつて沖縄人が有していた、その「天稟」、すなわち「個性」は、薩摩藩の支配によって發揮できなくなった。そのような状況か

ら「解放」したのが「琉球処分」だった。それは、筆者が前節で、伊波は「二通りの琉球処分観を示した」と述べたところの一つ、すなわち体質的及び思想的伸長を促したという評価で、これにより、沖縄人としての「個性」も発揮できる世の中が来る可能性がある」と伊波は考えた。

実際、伊波の「琉球処分」に対する初めての印象は衝撃的なものであった。それは、琉球処分によるショックで寝込み、この世を去った大好きな祖父の姿であり、それに伴う父親の放縦、家庭の不和など、幼い伊波の目には目紛しい家庭環境の変化であった。このような印象があったにも関わらず、伊波に比較的肯定的な琉球処分観を持たせたのは、自身が研究し、強く確信した「日琉同祖論」であり、幼い頃の体験をも超える「個性」へのこだわりであった。

さらにここからは、伊波の琉球処分観について、続きを見ていく。筆者は、「琉球処分」を単に「奴隷解放」としたのではなく、伊波が取上げて「一種の奴隷解放」としたところに注目している。伊波は次のように言う。過去の「奴隷時代」が、薩摩藩の財力の支えとなったことを説明しつつも、それは「琉球が日本帝国の為に払った大犠牲」であり、琉球はそれにより「致命傷」を受けた。すなわち、それによりもたらされたのは「民族性の大変化」であり、「三百年間奴隷的生活に馴致されて、自分で自分を維持して行くといふ独立自営の精神が殆ど皆無」になってしまったという事態であった。³⁸

「ヤマチヂフエー」—これは、ヤマトの人々の気の早いことを驚嘆して賛美する言葉であるが、沖縄の人々が、ヤマトの人々を羨望しつつ、そのようになれないのは、未だ「精神的に解放されてる証拠」³⁹であると伊波は言う。これが、伊波が「一種の奴隷解放」とした最大の理由であった。また、義務に従順で、権利の獲得に躊躇し、政治・産業・教育が発達しないことも、「精神的解放」の未到達にその原因を求めた。すなわち、伊波はこの論文中でも「奴隷解放」について、「形式上」の「奴隷解放」と「真の「奴隷解放」の二段階を用意したのである。さらに、伊波はこの時期、様々な場所で様々な対象に講演をはじめとする「啓蒙活動」を行っており、自らも「精神的な奴隷解放」を促す人物の一人として自負していたことは容易に想像出来る。

伊波は、当時の沖縄青年の中に、自己だけでなく、父兄や先輩、社会といった、より権力的なものに対しての「反抗的精神の高調」を確認し、「これやがて彼等が自己の解放を要求する内心の叫びに外ならない」と喜んだ。⁴⁰

さらに、伊波は、この論文の結びとして、自身の「啓蒙活動」の目的の根本的なところを述べ、沖縄に対する「遺言」的発言をする。

願くば沖縄青年の心から自己生存の為に金力や権力の前に容易く膝を屈して、全民族を犠牲に供して顧みないやうな奴隷根性を取去りたい。この根性を取り去るの でなければ、沖縄県人は近き将来に於て今一度悲しむ可き運命……奴隷的生活……に陥るであらう。而して之に次ぐものは社会の滅亡である。世に社会の滅亡ほど悲しむ可きものはない。これはた経世家の注意すべき大問題ではあるまいか。⁴¹

伊波は「彼等は自分等の利益のためには友も売る師も売る場合によつては国も売る」⁴²と「沖縄人の最大欠点」の中で、「御都合主義」について説明したが、ここで言われる「自己生存の為に金力や権力の前に容易く膝を屈して、全民族を犠牲に供して顧みないやうな奴隷根性」というのも一種の「御都合主義」、「娼妓主義」といった沖縄人の「欠点」である。伊波はそうした「欠点」を自らの手で「取去りたい」と考えた。それが「啓蒙活動」の本当の目的であった。そして、それが不可能ならば、再び「奴隷」となり、「社会の滅亡」をももたらすというのが伊波の見解であった。この伊波の「預言」的な口調に「遺言」のようなものを筆者は見出している。また、最後に「経世家」への提言を行っているが、これは、これまで見てきた論文で教育家に対して言及していたことにも関係している。伊波は「沖縄人の最大欠点」の最後に「陽に忠君愛国を説いて陰に私利を営むやうな教育家」⁴³は沖縄人の欠点を増長させると言ったが、この「教育家」を「経世家」に変えても、同じように解釈することが出来る。すなわち、「私利私欲」の為だけにはたらく「経世家」が沖縄に蔓延っていたのでは、「社会の滅亡」は免れないと伊波は考えたのであろう。自己の損得を顧みず、沖縄のことを第一に考える経世家が伊波の理想像であり、さらに言えばこれは伊波が、中学時代に夢みた経世家のあるべき姿でもあった。

このように、伊波の「琉球処分観」を見てきたが、最後に、この論文が『古琉球』改版（1942年）になぜ所載されなかったかについて考察したい。

その最大の理由は1924年、伊波の「啓蒙活動」の「限界表明」にあった。第一次世界大戦後の不況は日本もその影響を受けたが、糖業以外の産業に乏しく、さらにその糖業も海外生産のものに押されていた沖縄は、その不況の波を著しく受けた。その当時の状況は、有毒のソテツでさえも毒抜きして口にしなければならなかったので「ソテツ地獄」と呼ばれるが、伊波はそれを受けて、「今となつては（中略）啓蒙運動もまぬるい、経済的救済のみが私たちにのこされた唯一の手段である」⁴⁴と「限界表明」を行った。この中で伊波は「琉球処分」について

も次のように述べている。

兎に角琉球処分の結果、琉球王国といふ旧制度は破壊されたが、琉球民族は日本帝国といふ新制度の中に這入つて、復活した。けれども旧制度の中で育まれた惰性は制度が変つたからといつて、急に消滅するものではない。新制度の中に這入つてからもう四十六年にもなるが、まだ盛んに活動してゐる。⁴⁵

これはすなわち、伊波が啓蒙活動を通して達成しようとしたところの「精神的解放」が失敗に終わったことを意味するところでもある。「形式上」の「奴隷解放」は、変えようのない歴史的事実であり、既にその時点で達成されたものであった。伊波はその上で「精神的解放」を求めて運動したが、それも世界大戦に伴う経済破綻という巨大な時勢の力には抗えなかった。それが、「けれども旧制度の中で育まれた惰性は制度が変つたからといつて、急に消滅するものではない」と伊波が言う所以であった。

そのようなこともあり、1942年の『古琉球』改版には、この論文が収録されなかったのではないかと推測できる。ただ、「琉球処分」を「奴隷解放」という言葉で表すことはやめなかった。遺著となった『沖縄歴史物語』(1947年)でも、「著者は琉球処分は一種の奴隷解放だと思つている」⁴⁶と述べている。しかし、その様相は大きく異なつたものであった。島津氏の圧政から「奴隷解放」された沖縄は既に「疲れきつて」いたにも関わらず、「蹶然起つて汝自らを救え」という「あつけない鼓舞をされて」いた。これは、「実際のところをいえば、島津氏の琉球入りよりも、廃藩置県よりも、もっと致命的のものであった」⁴⁷これが、「ソテツ地獄」を経験した後の伊波の歴史観であった。圧政からの解放であった「琉球処分」は、「形式上」の「奴隷解放」であり、その点で、伊波は島津支配よりも、祖先を同じくする日本帝国の一員となるほうが沖縄にとって幸福で、当然なことであると捉えた。ただし、その一因となつた、後の制度が問題であった。既に疲弊しきつていた沖縄に対し、ただ鼓舞するだけで、裏では私利私欲にまみれた本土出身の教育家や経世家の存在は、沖縄をより疲弊させていった。さらに言えば、沖縄を鼓舞するために「啓蒙活動」を行った伊波自身への「自己批判」もここに含まれていると考えることも出来る。そして、そのあてなき鼓舞は、「精神的解放」の妨げとなり、この点から見れば、それは沖縄の没個性の原因となつた島津氏の圧政よりも「致命的」であると伊波に捉えられた。このように、伊波の「琉球処分観」は、「一種の奴隷解放」という基本路線は保ち

ながらも、二重のロジックで語られることになってくる。これも伊波普猷の「琉球処分」観のひとつの特徴であつたといえるだろう。

5. おわりに

本論考は、伊波普猷の『古琉球』から、「沖縄人の最大欠点」、「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」、そして「琉球処分は一種の奴隷解放なり」についてそれぞれの内容と、それに含まれる伊波の思想、また、それぞれの関連事項について筆者の見解を述べたものである。「はじめに」でも触れたように、これらの三論文をまとめて、「これはわけて郷里の人々に熟読して貰ひ度い」⁴⁸と行うように、伊波が沖縄の人々にどのようなことを心から伝えたかったか、さらには沖縄在住の知的リーダーとして、民衆を啓蒙する立場にあつた伊波が抱えていた、リアルタイムの沖縄への問題意識を読み取ることが可能な論文である。本論では、これらの論考に貫かれている伊波の論理や思想を大きく以下の三つに分けて論じた。それを明らかにすることによって、伊波の同時代の沖縄に対する問題意識を総括することができる。この問題意識を念頭に置いて、伊波の青年期の思想やこの後に訪れる啓蒙活動の断念の絶望の深さを照射することも可能である。

第一に、「日琉同祖論」や「無雙絶倫」論の考え方を、それぞれの論考中に見出すことができた。例えば「日琉同祖論」は、「琉球処分」を「一種の奴隷解放」とした際の根拠のひとつにもなり、「無雙絶倫」論は、沖縄の「個性」を没却させる契機となつた薩摩の圧政について言及する際の根拠となつた。また、様々な「欠点」をもたつた原因のいくつかを「島津氏の琉球支配」に求めたこともこれらの論文では確認でき、その薩摩観は生涯にわたつて保たれ続けることになる。

第二に、「沖縄人の最大欠点」でも言われているような「悪民族性」、すなわちそれは「恩を忘れやすいこと」であり、「御都合主義」であり、「娼妓主義」が、沖縄の人々の心の中にどれだけ浸透しているかが一貫して書かれたことである。そしてこの「欠点」については、直接的ではないが、「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」、「琉球処分は一種の奴隷解放なり」でも、度々例を持ち出し説明している。しかし、そのような民族性は「輕蔑」されるべきものではなく、「同情」に値するもので、そのような感情をもって教育家たちには沖縄の人々を教育してほしいと「琉球史の趨勢」で伊波は述べた。そして、第3節でも触れたように、それは一種の自己切開作業でもあつた。かつて、中学ストライキ事件の首謀者として退学処分となり、東京に遊学した際、「他日政治家にな

つて、侮辱された同胞の為に奮闘する決心をした」⁴⁹伊波であったが、政治家と学士という違いはあるものの、自らをも含む「侮辱された同胞」が「侮辱」される原因の最も深いところを抉り出したと言ってもよい。

第三に、「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」、「琉球処分は一種の奴隷解放なり」という、自身の「琉球処分」についての見解を示した際に、それぞれの論において、二つの「琉球処分」評価を与えたことである。一つは、「琉球処分」（廃藩置県）によって沖縄の人々が体質的にも思想的にも伸長したことを喜び、「奴隷」としての境遇からの「解放」によって祖先を同じくする民族への仲間入りを喜ぶ評価である。そして、もう一つが、「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」でいうところの「フヂツボ」論であり、「琉球処分は一種の奴隷解放なり」でいうところの「精神的未解放」論のように、「琉球処分」を手放しに歓迎しない伊波の評価であった。これは、伊波の琉球処分観の最も大きな特徴である。

これらの伊波の論理や思想から見える、沖縄の民衆への提言は以下のような流れになる。

それは、沖縄の人々の、深いところまで浸透している「欠点」を掘り起こし、彼らの戸惑いの根源のひとつの契機ともなった「琉球処分」という歴史的事象に対して、自身の見解を与えることがここでの最大の目的だった。伊波は、「我々は何者であるか」、「日本帝国に支配された我々はどうなるのか」という沖縄社会の声なき声を敏感に感じ取っていた。そして、前者の問いに対しては「日琉同祖論」をもって応え、後者の問いに対しては、同祖論を根拠に、「形式的な奴隷解放」であったと応じた。大きな話で言えば、「われわれ沖縄は、現在どのような歴史的位置に立っているのか」という問いに、同じ沖縄人、そして一知識人としての目線から応えたのである。そのような伊波だからこそ、その「欠点」を説く際にも、一種の「同情」を求め、琉球処分評価においても、それぞれ二重のロジックを示したのである。

当時の伊波は、その著作の冒頭に「汝の立つところ深く掘れ そこには泉あり」というニーチェの言葉を載せていたが、それを受けて自身も「深く掘れ己の胸中 余所たゆて水や汲まぬごとに」という琉歌を詠んだ。繰り返すが、沖縄の民衆の心の深いところにある「欠点」を認識させ、さらには現在の歴史的位置を確認させる目的がこれらの論考にはあった。そして、さらにその深いところを掘ったところにある、かけがえのない沖縄人としての「個性」を見出してほしいと伊波は望んでいたのではないかと解してこの論をおわる。

脚註

- ¹ 伊波普猷「古琉球の再版にあたりて」〔伊波普猷『古琉球』再版〕
- ² さらに言えば、この改版（1942年）は、版を重ね、『伊波普猷選集』、『伊波普猷全集』、『古琉球』（岩波文庫版）にも収録されているため、現在世の中に存在する『古琉球』の多くは、この「別物」の改版であると言わざるを得ない。
- ³ 伊波普猷「沖縄人の最大欠点」〔伊波普猷『古琉球』初版p.107〕
- ⁴ 同前
- ⁵ 明から清への変わり目の時期に、沖縄の使節はどちらの王朝にも対応できるよう、両方の帝に対する上奏文を持って行ったものを「空道」というと伊波は説明している。
- ⁶ 伊波普猷「沖縄人の最大欠点」〔伊波普猷『古琉球』初版p.109〕
- ⁷ 伊波普猷「琉球史の趨勢」〔伊波普猷『古琉球』初版p.101〕
- ⁸ 伊波普猷「沖縄人の最大欠点」〔伊波普猷『古琉球』初版pp.109~110〕
- ⁹ 伊波普猷「沖縄人の最大欠点」〔伊波普猷『古琉球』初版pp.109~110〕
- ¹⁰ 『古琉球』では、再版及び三版にのみ収録。
- ¹¹ 伊波普猷「古琉球の再版にあたりて」〔伊波普猷『古琉球』再版〕
- ¹² 鹿野政直『沖縄の淵 伊波普猷とその時代』p.98
- ¹³ 1911年、河上が沖縄で、沖縄の歴史・文化の独自性を強調した際、沖縄の非国家主義的性格を賞賛したのが、かえって沖縄世論の反感を買い、思想的事件にまで発展した。
- ¹⁴ ここでの改稿は、より細かな句読点が付いたこと、傍点の削除が主であり、内容は変わっていない。また、初版には、論文を結んだ後に、宜湾朝保の歌など3編あまりの歌や詩が載せられているが、再版以後はそれがない。
- ¹⁵ 伊波普猷「進化論より観たる沖縄の廃藩置県」〔伊波普猷『古琉球』初版p.112〕
- ¹⁶ 同前p.113
- ¹⁷ 同前
- ¹⁸ 同前p.115
- ¹⁹ 同前p.116
- ²⁰ 同前p.118
- ²¹ 同前
- ²² 同前pp.118~119

- ²³ ダーウィンはフジツボの研究者としても知られており、伊波がダーウィンの著作を読んでいたことは明らかではないかと推測される。
- ²⁴ 伊波普猷「進化論より観たる沖縄の廢藩置県」〔伊波普猷『古琉球』初版p.119〕
- ²⁵ 同前
- ²⁶ 同前
- ²⁷ 伊波普猷「古琉球の再版にあたりて」〔伊波普猷『古琉球』再版〕
- ²⁸ 伊波普猷「琉球処分は一種の奴隷解放なり」〔伊波普猷『古琉球』再版p.129〕
- ²⁹ 伊波普猷「琉球史の趨勢」〔伊波普猷『古琉球』再版p.111〕
- ³⁰ 伊波普猷「琉球処分は一種の奴隷解放なり」〔伊波普猷『古琉球』再版p.131〕
- ³¹ 同前
- ³² 同前p.132
- ³³ 同前p.133
- ³⁴ 伊波普猷「琉球人の祖先に就いて」〔伊波普猷『古琉球』再版p.68〕
- ³⁵ 伊波普猷「琉球史の趨勢」〔伊波普猷『古琉球』再版p.99〕
- ³⁶ 伊波普猷「進化論より観たる沖縄の廢藩置県」〔伊波普猷『古琉球』再版p.125〕
- ³⁷ 伊波普猷「琉球史の趨勢」〔伊波普猷『古琉球』再版p.99〕
- ³⁸ 伊波普猷「琉球処分は一種の奴隷解放なり」〔伊波普猷『古琉球』再版pp.136~137〕
- ³⁹ 同前p.137
- ⁴⁰ 同前p.138
- ⁴¹ 同前pp.138~139
- ⁴² 伊波普猷「沖縄人の最大欠点」〔伊波普猷『古琉球』再版p.119〕
- ⁴³ 同前p.120
- ⁴⁴ 伊波普猷「琉球民族の精神分析—県民性の新解釈—」〔『沖縄教育』第136号p.11〕
- ⁴⁵ 同前pp.7~8
- ⁴⁶ 伊波普猷『沖縄歴史物語』 p.168
- ⁴⁷ 同前p.187
- ⁴⁸ 伊波普猷「古琉球の再版にあたりて」〔伊波普猷『古琉球』再版〕
- ⁴⁹ 伊波普猷「自序」〔伊波普猷『古琉球』初版p.2〕
- 伊波普猷『古琉球』再版 糖業研究会出版部1916年
伊波普猷『古琉球』三版 郷土研究社1922年
伊波普猷『古琉球』改版 青磁社1942年
伊波普猷『沖縄歴史物語』平凡社ライブラリー 1998年
石田正治『愛郷者伊波普猷 戦略としての日琉同祖論』沖縄タイムス社2010年
鹿野政直『沖縄の淵 伊波普猷とその時代』岩波書店1993年
『沖縄教育』第136号 沖縄県教育会1924年

参考文献・資料

伊波普猷、服部四郎、中曾根政善、外間守善『伊波普猷全集』第1巻～11巻 平凡社1974～1976年
伊波普猷『古琉球』初版 沖縄公論社1911年

The view of Okinawa and proposals for people in 'OLD-LOOCHOO' written by Ifa Fuyu

Taro Takeuchi

This thesis will draw on Fuyu Ifa's most famous work "Old Ryukyu," specifically the essays "Okinawa's Great Fault", "Okinawa from the Perspective of Evolution Theory", and "Ryukyu Disposition: The Released Slave" in order to get a clearer picture of the problems he felt were facing Okinawan society.

Ifa was eager to see the people of Okinawa read his writings, and that is why an analysis of these texts will help us understand what kind of message he wanted to convey to the locals. During his life, Ifa spent a great deal of time interacting with the Okinawan people, but we do not have so many sources that provide an insight into his thinking. The purpose of this thesis is to help clarify the ways of thinking that were behind Ifa's essays.